

心理学研究室の先達者たち

原 一雄

私たちの心理学研究室は誠に素晴らしき二人の先達者に恵まれた。お一人は岡部弥太郎先生であり、もうお一方はモーリスE・トロイヤール先生である。この方々について思い出を語る機会が与えられたことは、研究室の一員として甚だ光栄至極と存ずるところである。そして、このことに思いを致すとき、斯様な卓越した指導者をお迎えできた教育研究所を創設し、そこでの研究活動の基本方針を明示され、謂わばわが心理学研究室の土台骨を築き上げて下された初代研究所長、日高第四郎先生についても一言語らねば、どうしても相済まないという気持ちに馳られるのである。そこで先ず、日高先生と心理学研究室との関連について、私なりの受け留め方を述べさせて頂こう。

日高第四郎先生

『ICU教育研究第1号』（1955）の『巻頭のことば』として日高先生のお書きになられた論文「ICU教育研究所設置の趣旨とその課題」の中から、心理学研究室として特に重要と考える箇所を二三抜粋させて頂こう。先生は次のように述べておられる。

「五、ICUの教育の大学院の計画。——ICUが特に新しい日本及び東洋の新興諸国に対して果たすべき任務は、キリスト教的文化を背景とせる世界的視野をもつ有能な信頼に価する人物を一人でも多く養成するに

ある。これが為に I C U は我国には類例の稀な教養学部を先ず創設し、一般教養に重点をおいた普遍的にしてしかも個性豊かな人格の養成を目指しているが、之に次いで教育の大学院設置を計画して民主教育の改善に貢献しようとしている……。 (6頁)

七、教育研究所の研究課題は何であるか。

D. 教育心理学及教育社会学の研究。現代における教育の科学的帰納的研究の基礎学は心理学と社会学だといわれる。教育が哲学的理念乃至は価値の原理にかかわるのみでなく、現実の個人及び集団の成育と発展とに係わる限り、教育の科学的研究は人間形成の Genesis の問題である。(9頁) ……ことに被教育者の生理的・心理的素質とその発展の過程や社会のもつ無意志的・無計画的にしてしかも強大な影響力ある教育的、或は反教育的機能の科学的分析理解をまたなければ、教育学はややもすれば個人的主観的見解・熟練信念の集積に墮する虞がある。この意味において教育心理学及教育社会学の研究は促進しなければならない。(10頁)

F. 大学生の補導問題の調査。現在我国の大学が当面せる最も微妙にして困難を極めたこの問題は日本の運命にもかかわる重大問題であるが、その順当な解決に資する為、先ず包括的な学生生活の実態調査をすすめ補導の原理及適切な方法の研究に進まんとするものである。(10頁)」

上に示された基本理念と中心的課題こそ、如何に時代は変わろうとも、わが民族の歴史を背負いつつ人類の未来を信じて互に研鑽に励む、われわれ心理学研究室ならびに大学院教育心理学専修課程の原点ではあるまいか。

日高先生は1896年にお生まれの、古武士の面影を残された如何にも明治の人と申し上げるに相応しいお方であった。同時にまた、リンカーンのゲテスベルグにおけるスピーチを屢々暗唱して下さるリベラリストでもあられた。

教育研究所の集いの折、先生にお話をお願いすると必ず触れられる話題が二つあった。一つは学習院院長としての乃木将軍の思い出であり、二つ目は戦後、文部次官としてGHQと渡り合いながら、今日の新しい教育制度を発足させるに際してご苦労なされたお話である。今にして思えば、正に先生の理想像と生き甲斐とが、そのお話しの中に生き生きと映し出されていたのである。

教育研究所所員としての他、私は就任2年目から、学生指導担当副学長であられた日高先生に行政補佐としてお仕えした。寮アドバイザーでもあった私は、寮生の問題でよくご相談に伺うと、先生は戦時中軍部が横暴を極める中で、どのように左翼の学生や中国・朝鮮からの学生たちを庇ったかというお話をなさり、それをお聞きしている内に、私は何時の間にかカウンセリングとガイダンスの妙意を伝授して頂いているような気分になったものである。

もう一つ、極めて個人的なことながら日高先生について是非記して置きたいことがある。丁度20年前、能力開発研究所のテストをICUの入学試験の一部として利用する案を教授会に提出し、その同意が得られたときのこと、既に退職しておられた先生から早速「お目出とう」のメッセージを頂戴した。後にこの提案が学園紛争の火種となったときには、何故キャビネットが自分を呼ばなかったのかと先生は非常に残念がられると共に、私に国立教育研究所への転職を勧めるため、わざわざ学生たちのピケの中を押して泰山荘脇の拙宅までお越し下さったのである。このときも、戦後間もなくGHQの勧告によって進学適性検査を実施した頃のエピソードをいろいろ私にお聞かせになり、励ましのお言葉を何度も頂いた。そして、先生のご厚意に背いてICUに残る決意を申し上げたときも、笑顔でご了承された上、それから屢々ICUへお見えになる度毎に、「原のお馬鹿ちゃんへ」というメモと共に文部次官当時の貴重なノートをお貸し下さるようになったのである。

岡部弥太郎先生

岡部弥太郎先生を学生たちは三鷹天皇とお呼びした。小柄ながらもしっかりとしたご体格で、口許のお髭がよく似合っておられた。ベージュ色の日傘をさしてバス停に向かわれる先生の周りを若い女子学生たちがお供している姿は、まことにその呼び名に相応しい一幅の絵として今も私の脳裏から離れない。

1894年生まれの岡部先生は、群馬県高崎中学校、第一高等学校文科、東京帝国大学文学部心理学科をご卒業になり、母校の助手、立教大学の教授を経て1935年再び東京大学に戻られ、20年間、教育学助教授および教育心理学教授として勤められた。この間、わが国の教育測定学の草分けとして、多くの研究者を育ててこられたが、中でも肥田野直、池田央、古畑和孝といった諸先生方は秘蔵っ子中の秘蔵っ子で、岡部先生がICUへお移りなされるや相次いで本学の助手や非常勤講師にご推薦なされ、私たちの研究室の開設に当らせられたのである。就中古畑先生とご一緒に設計なされた本館4階の実験室は、斬新な心理学のモデル・ラボとして、当時学会の話題をさらったものである。この間にも日本精神分析学会の会長に押されるなど、先生のご関心は実に幅広い分野に渉るものがあつた。

新任教員として初めてご挨拶に伺ったとき、先生はいきなり真面目なお顔で「鴨が葱を背負って来たので頂戴した」と申されたのには、私も聊か度胆を抜かれてしまった覚えがある。この時のお話から、トロイヤー先生の価値観研究のお手伝いと古畑先生の留学中の穴埋めを兼ねるものとして、一面識もない私の採用を先生が強く推して下さったという事情を初めて知らされた次第である。常に物事を率直におっしゃられる先生に対しては、こちらもまた何等隠し立てする要もなく、何事も正直にお話をさせて頂けたことは誠に幸いであつた。

当時は本館の一階，玄関の西隣が心理学の教員室であった。しかも，岡部先生のお部屋のすぐ隣に個室を頂いた私は，絶えず先生の下に出入りするお弟子様たちや訪問者の方々にご紹介して頂くことができた。帰朝したばかりの，そして日本の学会に繋がりを何一つ持たない新参者にとって，先生のご厚情は本当に身に染みて有り難かった。また，ドアの開け閉めが筒抜けのように，毎日午後になると決まって20分から半時間，健やかから鼾声が聞こえてきたものである。キャンバス製の簡易長椅子に横におなりの先生を想いながら，壁のこちら側で本を読んだ日々がこよなく懐かしい。

先生はまた，屢々海外から送られて来る審査依頼の論文をお見せになってコメントを求めたり，大学院のゼミで因子分析の授業の代講をさせたり，今にして思えば，所謂教員としての資質開発（FD）を無言の内にして下さっていたのである。また，中軽井沢で催された第1回心理学サマー・セミナーでは，自叙伝の研究のお話しで参加者を魅了し，そして食後にはエプロン姿で皿洗いをなさり，私共を大いに喜ばせて下さった。那須で開かれた第2回目のサマー・セミナーでは，弁天湯の温泉プールに浸りながら，先生が海軍兵学校の入試のために開発された人格評定尺度の有効性や淡路円次郎先生と共同で作成された「淡路・岡部式向性検査」のお話しを聞かせて下さった。時の経つのを忘れて先生のお話しに耳を傾けた20数年前の夏の日のことが，恰も昨日の事のように蘇ってくる。それこそ本当に裸でお付き合いさせて頂けたという喜びは，終生忘れることがないであろう。

日高第四郎先生の朗々たる節回しも岡部弥太郎先生の美しいテノールも，今や再びお聞かせ頂く術はない。しかし，両先生から承ったお話しの数々は，研究室および研究所の貴重な無形財産であり，ご指導を受けた私共が何時までも後輩たちに語り継ぐべきものとする。聊かなりとも「こころ」の真髄に触れ得たという感銘は，それをまた別の人との出会いに託したい。平成の世代にも明治の心意気が通じぬ筈はないと信じつつ，このことをもって両先

生に対するご恩返しに代えさせて頂きたいと願う次第である。

モーリス E. トロイヤー先生

モーリス E. トロイヤー先生は昨年8月、85才を迎えられた。お足が多少ご不自由のようであるが、フィラデルフィア市郊外の老人ホームで奥様とご一緒に、今なお教育関係のお仕事や地域の奉仕活動に余念がない。あるいは誤りがあるかも知れないが、先生から伺った昔話を私なりに纏めてみると、次のような先生のプロフィールが描かれる。

オハイオ州の片田舎で牧師の息子として育った先生は、聖書の知識よりも信仰生活の実践を尊ぶという態度を徹底して身に付けておられた。兄弟喧嘩をする度毎に父君から理由を問わず互に相手の足を洗わされたという幼い頃の経験談は、学生の懲罰問題が論議される度にご自分の考えの具体例として、必ず引合にお出しになられたものである。

先生はブラフトン・カレッジで生物学を専攻し、オハイオ州立大学では実験心理学で修士号を取得、そして後に同大学から教育心理学の博士号を授与された。院生時代には高校のフットボールのコーチをし、学部時代の同級生でチャー・リーダーをしておられた現夫人と結婚されることになる。二つの母校の教壇に立たれた後、先生はシラキュース大学に招かれ、全米教育審議会の学習評価副部長の要職の傍ら、同大学の学習評価センター所長や大学調査部長を歴任し、教育効果についての他面的な評価診断を試みられたのである。この分野でも、先生は終始理論家というよりは実践的教育者としての道を歩まれたように見受けられる。そして、その背後には、かのデューイの進歩主義教育運動の中で行われた7年研究に、直接ご自身で係われたときのご経験が永く生かされていたと考えられる。

I C Uは新しい教養学部という実験大学を創設するに当り、その教学計画の責任者を海外に求めた。そして、その役に最も相応しい人物はアメリカ広しと雖もこの方を差し置いて他に誰も無しと、J I C U Fから推薦されて来られたのがトロイヤー先生である。1949年の御殿場会議に先立ち、故ディフェンドーファー財団総裁を助けて、精神的にも物理的にも、本学の青写真の作成に当られたのである。

例えば、大学要覧第1巻（3－5頁）に掲げられた本学の基本方針6ヶ条はトロイヤー先生の直々の筆になる。また、教養学部の教育目標10ヶ条も、先生と初代総長湯浅八郎先生が共同で原案を書かれたとお聞きしている。これらを12ヶ条に纏めたものが他ならぬ本学の憲法とも言うべき『国際基督教大学設置要項』（本誌76頁参照）なのである。

また、こういうお話しを先生のお口から伺ったことがある。I C Uの場所を決めるに際し、平和日本と国際親善の象徴である富士山と太平洋の少なくともどちらかが見える土地という条件が出された。日本側の募金運動関係者は、交通の便と東京女子大に近いという理由から、現在厚生園のある吉祥寺の土地を有力候補に挙げたが、24時間教育のキリスト教主義全寮制キャンパスを目指して、寧ろ不便な大沢を選ぶことにされたそうである。このお話しは、西武電鉄がI C Uのため是政線に新しい駅を設置しようと申し出たとき、湯浅総長が教育的見地からお断りになられたという逸話と符を一にするものである。

先生と初対面の時のことは、何度思い返しても冷や汗が滲み出る。当時、先生の肩書きは学務教務副学長で、本館2階東北側のお部屋におられた。ご挨拶を済ますと、直ちに次の質問が返ってきた。「教育者としての貴方の信条（credo）は何ですか。」ご記憶の方も多いと思うが、トロイヤー先生の発音はこれまた独特なものであって、聞き慣れない私は、先ず最初にこの

‘credo’で立ち往生してしまった。しかし、これでICUが如何なる大学か、また、どういう覚悟が必要か、身に染みて教えられた訳である。

そもそも私がICUへ来ることになった経緯は、先にも述べたように岡部先生のご高配と共に、この教育研究所でトロイヤー先生が始めようとなされておられた『大学生の価値観研究』の統計的処理のお手伝いをするという、正に千載一遇の機会に恵まれたからである。この研究プロジェクトは、ロックフェラー財団からの研究助成金2万ドルを基にして、社会科学系列の一般教育科目「価値観研究、1+1+1単位」の授業と研究とを統合させた、所謂アクション・リサーチであった。新入生の最初の学期と2年生の冬学期、それに4年生の秋学期を捉らえ、人生観や世界観に関する哲学的、社会学的、心理学的文献の講読と討論の傍ら、教養学部在学中に起こる学生たちの意識の変容を追跡しようという、非常に意欲的な試みであった。そして、このプロジェクトを通し、また、その時の経験を基にして、数多くの学士論文や修士論文が生まれたことは誠に喜ばしい限りである。

しかしながら、この価値観研究そのものは、最終段階において学園紛争に巻き込まれ、その成果を広く世に問うことなく終結させられた。誠に痛恨の極みという他はない。そして、トロイヤー先生ご自身がその打撃を最も強く受けられたことは今更申すまでもない。しかし、この研究そのものの代りにはなり得なくても、日本の土壤にICUの教育理念が何処まで根付くことができたのか、再度確かめようとなされたのが、あの1974年度の創立25周年を記念した卒業生追跡研究であったと私は理解している。

聖日の午後も一人研究室でペンを走らせたトロイヤー先生の一途な情熱は、働き蜂と言われる日本人の目にも大きな驚きであった。そして、その先生を陰で支えつつ、至る所で学生や教職員たちの相談に乗り、更には大学近辺の人々にまで温かいクリスチャン・ホームを味わせて下さったミセス・トロイ

ヤーを抜きにして、初期のICUのキャンパス・ライフを語ることは出来ない。ご夫妻の蒔かれた諸々の種は、ご退職の折に植えられたシーベリー教会堂脇の二本の檜の木のように、このICUにしっかりと根を下ろし、われわれの心の中に、また、ここを巣立つ若者たちの心の中に永遠に生き続けることを、教育研究所の同僚諸氏と共に証して、お二人への感謝の印となすことが、今筆を擱こうとしている筆者の切なる願いである。